

珍しい水田 堀田

(輪中地域特有の土地利用の形態)

輪中館資料

(NO. 6)

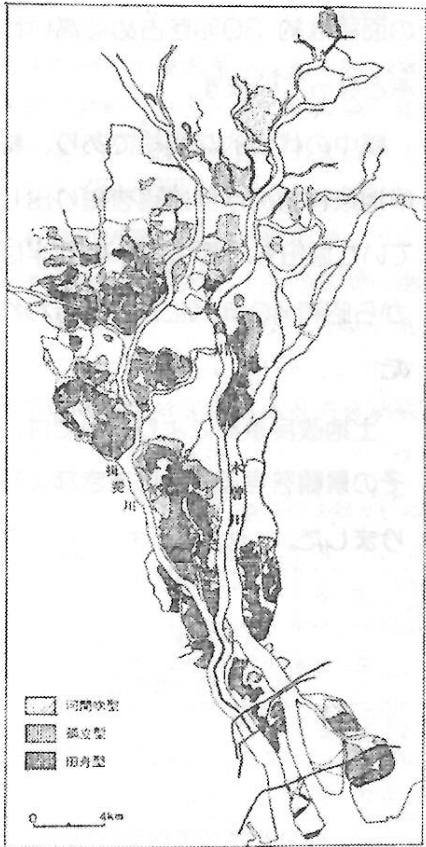
輪中地域特有の土地利用形態を示すものに「堀田」があります。この地方は日本でも有数の低湿地であり、この地方では堤防決壊による洪水がなくても、米作は大変不安定な状態でした。そうした低湿地帯における、土地利用形態の特色といえるのが「堀田」です。この「堀田」は輪中農民の生きるための生活の知恵として生みだされたものです。「堀田」とは、田面の一部の土を切り取り、その土を隣接する田面に盛り土することにより出来た掘上げ田と堀潰れを総称してよんだ呼称です。



沼田における田植え

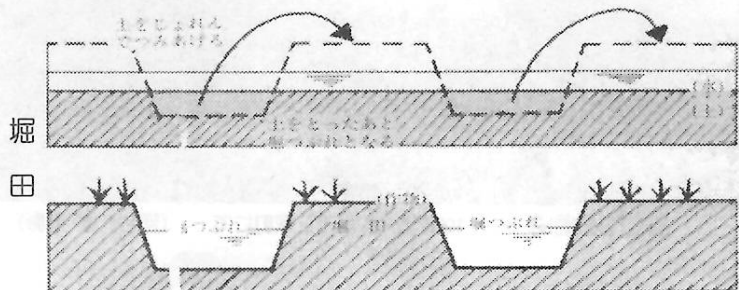
各輪中の南部の低い地域では、北部の高い地域からの悪水がたまり排水の悪い沼田が多くありました。天気が良くても水田には数センチも水がたまって田植えもできないほどでした。そのため1反歩から3~4升しか収穫のない時

が甍々ありました。そのため飢えに苦しめられ糠やタニシを食べて飢えをしのいだほどでした。この排水不良による不作を除く耕法として江戸時代後半より明治にかけて始まった土地利用の方法が堀田方式です。この堀田は比較的安定した収穫を得ることができますが、耕地が少なくなるという欠点がありました。



西濃平野における堀田の分布

堀田開発の歴史は、現在のところ宝暦10年(1760年)の記録が最も古いとされています。江戸時代後半から堀田造成が始まったのは、その頃より輪中地域の水稻の収穫が急に減っていくことと大きな関係があります。例えば高須輪中の本阿弥新田では、慶安2年(1649年)に600石を上納した村が90年後には、わずか17石に減少するという異常な状態でした。各輪中も多少の相違はありましたがこのような傾向でした。この「水損不作」の対策として堀田の造成がすすめられた。しかし、堀田の造成は大変苦しい仕事でした。造成後も毎年毎年「長じょれん」という特殊な農具で堀潰れの泥土をすくいあげる作業(「どべあげ」)はつらいものでした。この農作業は輪中地域では欠かせないものでした。



堀田にも様々なタイプがあります。代表的なものは、いつかの水路をもち排水路に連続する「田舟型」です。この田舟型に対して堀潰れの水路が排水路に通ずることのない「孤立型」もありました。その他、大垣市の北部にある「河間吹型」とよばれるものもありました。河間町、信濃河間町、領家河間町などと呼ばれる地名に代表されるように、扇状地が三角州に移る扇端部付近の浅い砂層から湧出する伏流水を排除するためにもうけられた水田中の細長い溝渠をもうけた堀田でした。

「田舟型」「孤立型」の堀田の分布の特色は、輪中の中でも比較的土地の高い北部及びその周辺部には「孤立型」の堀田が多くみられました。土地の低い南部や中央部になるにつれて堀潰れの水面の比率の高い「田舟型」が多くなっています。

堀田の分布は、ほぼ輪中地域全体にみられましたが、各輪中ごとにみると、その輪中の中で土地の低い中央部や南部に集中しており、土地の高い所では堀田の分布をみない輪中も多くあります。例えば、大垣輪中では土地の高さが最も高い最北部では、海拔12mあるのに対して、南部の横音根では、わずか

か海拔 2.5mにすぎず、その差は 9.5mとなります。そのため堀田の分布も 5.5m以北の高い地域にはみられず、それ以南の低位部のみ分布しています。なかでも最も分布の密なのは、2.3m等高線が円を描く盆地状の地形の底部にあたる浅草地区であり、その堀潰れの面積は約 30%を占める高い比率となっています。

輪中の代表的な農耕であり、輪中地域特有の水郷景観を創り出していた堀田も、昭和 30 年代半ばから昭和 40 年代にかけて行われた

土地改良事業により今日では、その景観を見ることはできなくなりました。



田舟型の堀田 —1968年 海津町外浜にて— (河合 孝 撮影)



孤立型の堀田 —1966年 大垣市三塚町にて— (河合 孝 撮影)

水屋

(輪中集落の立地と水屋建築)

輪中館資料

(NO. 7)

大垣は伊勢湾より約40~50Kmの内陸部にありながら、平均標高約5mで破堤入水による外水氾濫だけでなく、排水不良による内水氾濫によって大きな被害を受けてきました。そのため苦くからの集落は微高地に立地して出水に対応してきました。従って、大垣には「島」という字のつく地名が多くあります。島・天島・島壘・多芸島・八島・草道島などがあり、南の高須輪中には「州」(集)という字のつく地名が多くみられます。このような「島」「州」などは、その字が表すように微高地を表す地名だと考えられます。この微高地は自然堤防と称せられる河川の氾濫堆積による地形であり、輪中地帯では最も早く住居として使われました。

輪中景観を代表するものとして土地利用では堀田、集落では水屋建築があります。堀田は土地改良事業により完全に消失しましたが、水屋建築は、いまなお大垣輪中でみることができます。昭和47年の調査では大垣市域で216棟が分布していました。

水屋の起源については、江戸時代の寛政年間(1789~1800)の巡行記録の「濃州 徇行記」に「…故に堤防一たび潰崩すれば民家水中に沈む事数日、屋中に魚住み、…是故に毎戸石を積み置を築き小舎を設け以て水難を避く、是を水屋と云う…」と水屋の記録がみられます。これを利根川流域では「水塚」、淀川では「段蔵」、信濃川では「水倉」と称していますが、分布数、規模、様式などから輪中地域がその代表的な地域だと考えられます。

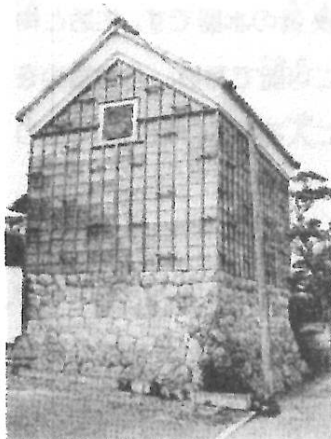
水屋は、この地域が低湿地で水郷地帯であることを物語っており、洪水から命や財産・家屋などを守るための特殊な防水建築であるといえます。水屋は洪水の時の避難場所として、また米や日常必需品を貯えておく倉庫として、母屋とは別棟の地盤の高いところに建てられています。そして一度大洪水に見舞われたら、水がひくまで起居し、橋えつけの小舟で他との連絡をとっていました。大水になったと

いても、その都度母屋からいろいろなものを運ぶことはできないので、水屋に生活必需品や貴重品が置かれていました。たとえば、味噌、しょうゆ、漬物、襦袢し、米、麦、その他の穀物などが貯蔵されていました。さらに長持ちやたんすなどの調度品や貴重品も常時置かれていました。

この水屋は、利用目的、構造、資材などから次の三つに分類されています。

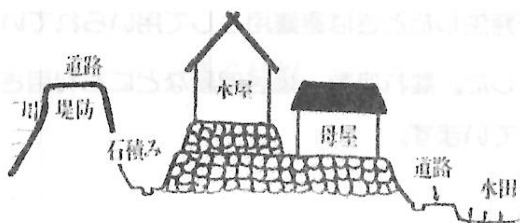
- A. 住居式水屋
- B. 倉庫式水屋
- C. 土蔵式水屋

上記の三つに分類されますが、これらの三つを組み合わせた構造の水屋もありました。



高さの違い

- ① 水屋と母屋
- ② 母屋と道路
- ③ 石積み



A. 住居式水屋

一度洪水に見舞われると、数日から時には水が引くまで一カ月もの長い間、母屋を使うことはできず水屋で生活しなければならず、家族が寝起きすることができる構造を持っています。従って居室があって、畳が敷いてあり障戸を備え、採光に必要な窓を備え、床の間や便所などの施設も造られていました。現在でも離れ座敷や勉強部屋などに利用されています。



大橋家の水屋 大垣市浅草

B. 倉庫式水屋

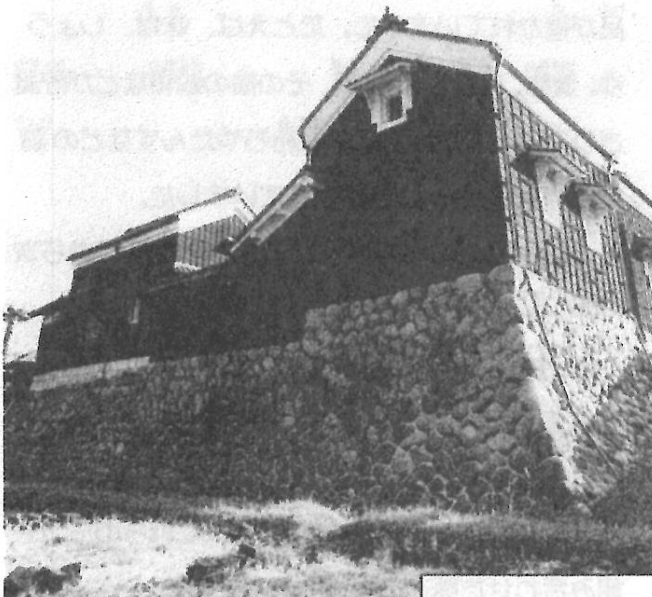
穀物や家財道具などを貯蔵、保管する機能をもつもので、その土間や庇は概して味噌部屋になっていて、かつては、ここで味噌、しょうゆが造られ貯蔵されていました。現在でも土間には味噌桶や水かめなどの道具や漬物や梅干しなどが置いてあります。その利用目的から中は涼しくうす暗い構造となっていました。普段は倉庫として用いて洪水の時には避難場所ともなりました。

C. 土蔵式水屋

厚い土蔵壁をめぐるし、入口は二重構造になっているものが多くみられました。中には重要な家財道具や家宝・什器などが収納されており、二階があり、床は一階も二階も板張りでした。土蔵には米蔵と道具蔵とがあり、別々の蔵をもつところもありました。米蔵は旧地主階級の家に多くみられました。

A・B. 住居倉庫式水屋

住居式と倉庫式の両方の機能をもっているものです。すなわち同一建物の中に居室と倉庫をもっているものです。輪中に生活する人々の知恵が生み出した水屋の典型的な形式で狭義の水屋です。生活と物資の保管とが同時に可能であり、どの輪中をみても、この類型に入るものが最も多くありました。



清水家の水屋 大垣市万石

A・C. 住居土蔵式水屋

土蔵本体は土蔵式の水屋と同じものですが、その庇または庇を延長した部分に居室をもつものです。この居室は、もともとは蔵番の住居用としての性格を持っていましたが、水害が発生したときは避難用として用いられていました。離れ座敷、隠居部屋などにも利用されています。

水防倉庫

(今も残る洪水の守り)

輪中館資料

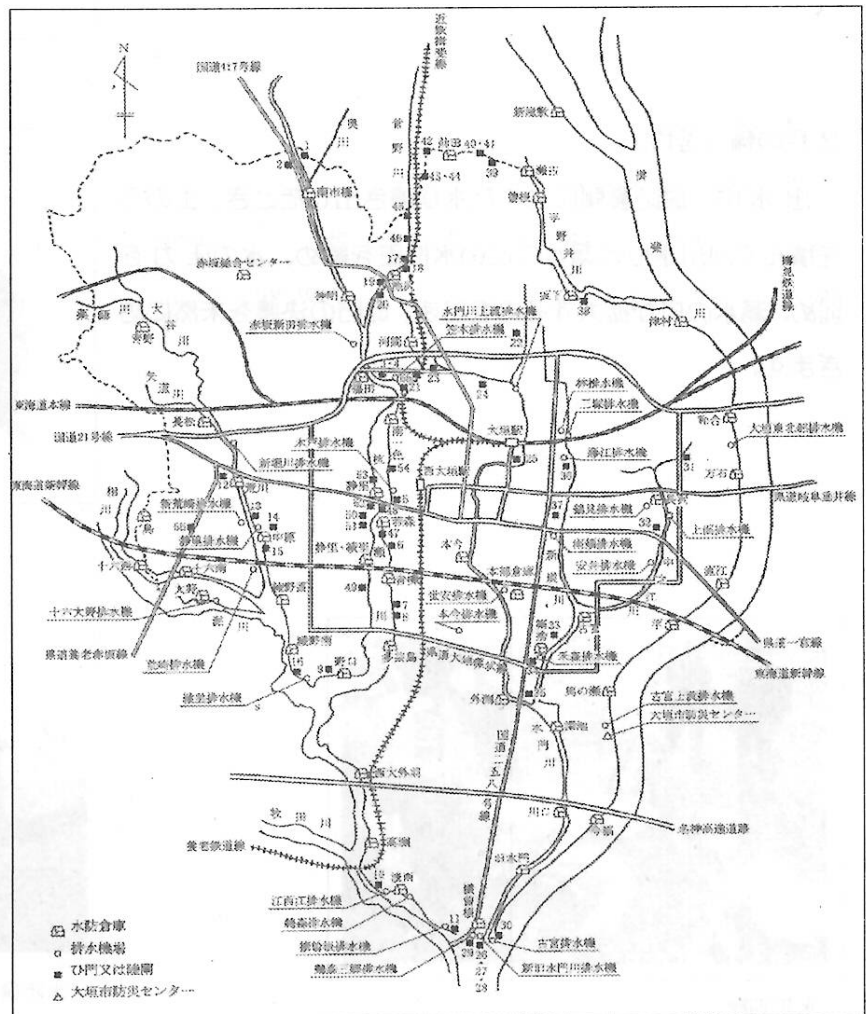
(NO. 8)

水防倉庫とは、輪中堤防の上にみられる倉庫で、破堤入水を未然に防止するための資材が収納され、輪中民の生命と財産を守るために重要な役割を果たしています。輪中地域南部では「郷倉」と呼ばれることが多いが、もともと「郷倉」は年貢米を城下または他の目的地に輸送する前に収穫する蔵や、穀物備蓄用の倉庫を意味するものでした。福束輪中では、水防資材の他に昆布・わかめ・乾物・その他の副食を貯蔵し備荒用の性格を持っていたので、この地域でも「郷蔵」と呼ばれていました。郷蔵以外に古い名称としては「水小屋」「諸式蔵(庫)」ともいいました。このような機能をもつ水防倉庫はすでに江戸時代に大垣藩に「水小屋」として存在しています。大垣藩では、記録によると「水小屋百軒、所之名主領、杭木式百本、松明四百挺、俵四百、縄六束、大縄二把、掛矢五」とあります。

輪中は、運命共同体であり、水防が輪中の最大の課題であり、大垣藩も厳重な水防体制をとっていました。藩内の河川の堤防の管理を各重臣に割り当て「堤持口絵図」を作成してその責任をはっきりとさせていました。また、水防組織を整え、主要な堤防には水防倉庫を配置していました。

現在の輪中地域の水防活動は、昭和24年(1949)に成立した新しい水防法によって行われています。水防組合をつくり、施設として無線・水防倉庫及び現場倉庫を備えています。そして、水防倉庫には、杭、麻袋、掛矢、縄、鉄線、蛸籠などの資材を収納し、堤防が切れるのを未然に防ぐための活動ができるように備えています。

水防倉庫は、かつて堤防が決壊した場所に多く位置しており、水害を受けた回数や程度との関係がみられます。水害を未然に防いだり、最小限に食い止めることができるかどうかは、ひとえに訓練された水防活動にかかっています。

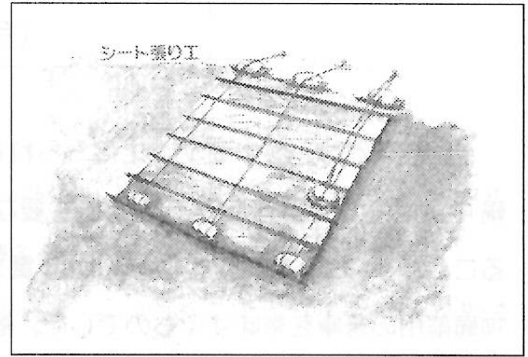


大垣輪中の水防倉庫分布図(平成 23 年度)

水防工法のいろいろ

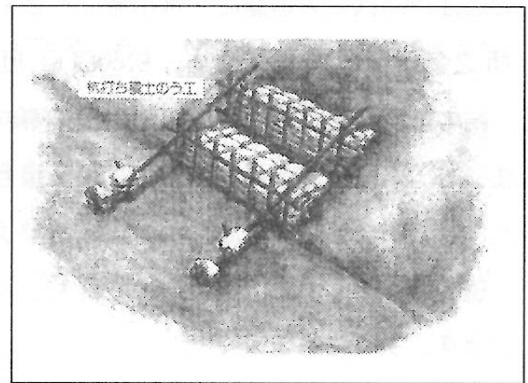
1. むしろ張り (シート張り、ブロックマット、 スイボウTマット)

裏のり面 (川表) が崩れ始めたとき、むしろを重ねて縄で縫い合わせて、その部分をおおって拡大するのを防ぎます。最近では、むしろにかわってシートやブロックが使用されます。



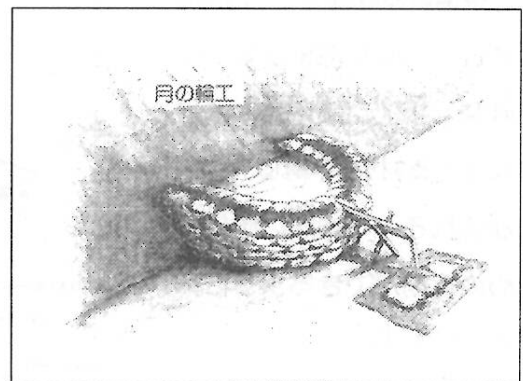
2. 杭打ち積土俵

裏のり面が崩れ始めたとき、杭を打って土俵を積んで拡大するのを防ぎます。



3. 月の輪 (釜段)

出水中、堤防裏側にもれた水が噴き出したとき、土のうを積んで河川水位と漏水口との水位差を縮め、水の圧力を弱め、漏水の口が拡大するのを防ぎ、堤防の決壊を未然に防ぎます。



水防訓練



水防倉庫

大垣市多芸島

水神さんと決壊碑

(洪水への守り神と記念碑)

輪中館資料

(NO. 9)

輪中堤を歩くと小さな祠がよくみられます。これは「水神さん」と呼ばれるこの地方特有の信仰です。「水神」というまでもなく水を主宰する神でありさまざまなものがあります。

例えば、谷地や扇状地などの乏水地域の水神は「湧水の涸れないことを神に託する」ものであり、多度神社や貴船神社の水神は「雨乞いを願う」ものです。あるいは漁業集落にみられるものの多くは大漁祈願であったり、農耕生活と結びつく田の神も水神です。これらは、いうならば限りなく水に恵まれることを祈願するものです。これに対し輪中地域の水神はその性格を大きく異にして「水難除け」つまり堤防守護神・決壊守護神なのです。

水に悩み苦しんだ輪中の人々は、そのはかない願いを神に託しました。特に決壊したところのある堤防や、川の屈曲部の危険な堤防上に守護神として祠を建立したり、あるいは洪水時に流れついた御神体を堤防上に安置して水難除けの水神としました。これが輪中地帯における水神信仰であり、輪中地帯の人々は「水神さん」と呼んで信仰しました。水神の分布をよくみると、かつて堤防の決壊した箇所に祀られたものがきわめて多くみられます。例えば有名なものとして杭瀬川左岸堤上の多芸島にある水神の

「決壊守護神」は明治29年に堤防が決壊したところであり、いまでも決壊した9月8日に水難除けの祈願祭がおこなわれています。また十六輪中の相川左岸堤上にある水神さんも堤防の決壊した場所に祀られたもので、祭りのおこなわれる7月16日は堤防の切れた日です。このような例は数多く揖斐川右岸の平、直江、三本木の水神さんもそうであり、直江の水神さんには「五穀豊穰 堤防安全」の文字が石碑に刻まれています。

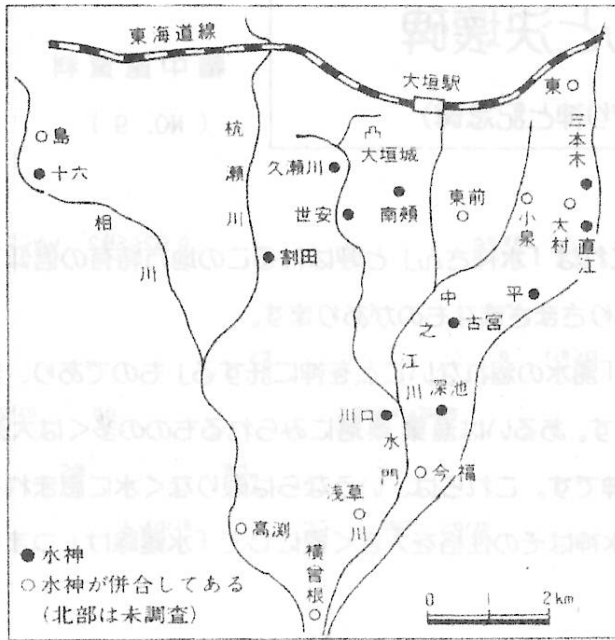
このように、輪中堤防の決壊箇所に水難除けとして水神さんを建立することこそ、土木技術の未発達な時代での生活の知恵でした。すなわち、一度決壊した堤防は再び同じ箇所が決壊する傾向がきわめて強くみられました。昭和51年の9月12日の災害起点が、長良川右



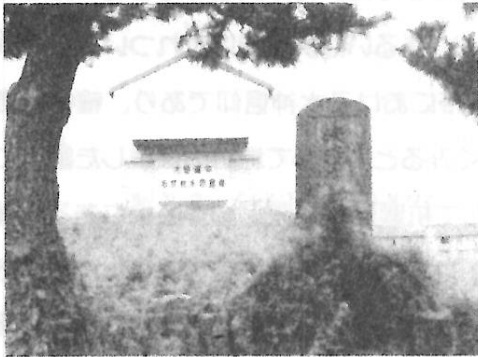
平の水神

岸森部輪中のかつて堤防が決壊した場所でした。同様な事例は古い地図などにより確認されていますが、忘れられてしまうことが多く、そのようなところに水神さんを建立することによって、その地点の危険性を後世の人々に伝承警告してきたのです。「水神さん」は、川のもつ恐ろしさを体験的に修得させようとする生活の知恵であったのです。そして、その祭りは決壊日が多く、6月から9月にかけての出水期に集中しています。

図(2) 大垣輪中の水神分布図 (西本悦夫氏原図)



三本木の水神



多芸島の 決潰守護神



十六の水神



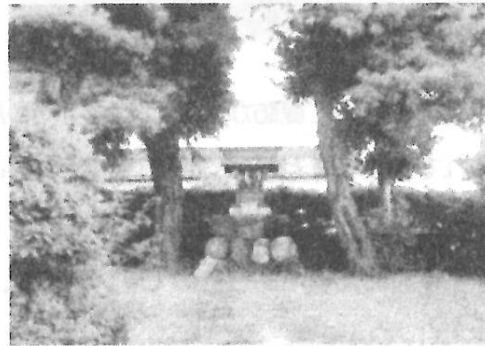
久瀬川の水神



川口の水神



馬の瀬の水神



深池の水神

宝曆治水

(平田鞞負と薩摩義士の功績)

輪中館資料

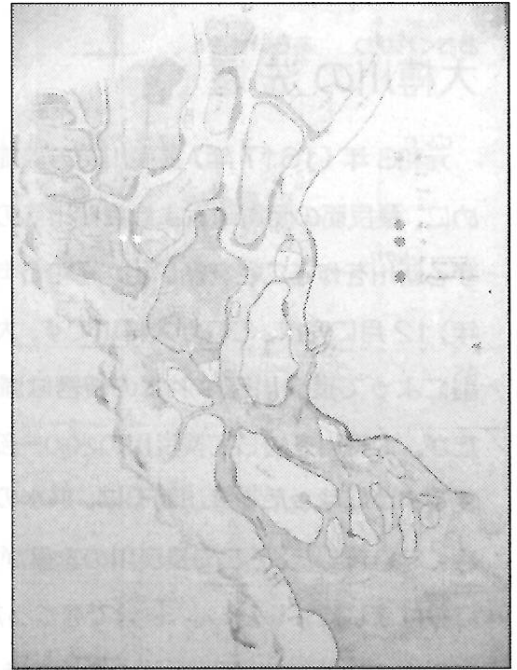
(NO. 10)

木曾三川の治水工事は、豊臣秀吉の時代に木曾川に堤防が造られ、慶長15年(1610年)徳川義直によって現在の犬山から弥富までの48Kmに及び堤防が築かれました。この堤防は、尾張藩をかこむ形であったので「お囲い堤」と呼ばれ、洪水対策とあわせて西国大名の侵入にそなえる軍略上の意味あいが強いものでした。そのため、美濃地方の諸藩の堤防補強は、尾張藩の過酷な条件にしばられると同時に地理的な要素も加わり、輪中地帯は洪水のたびに水害に苦しめられてきました。

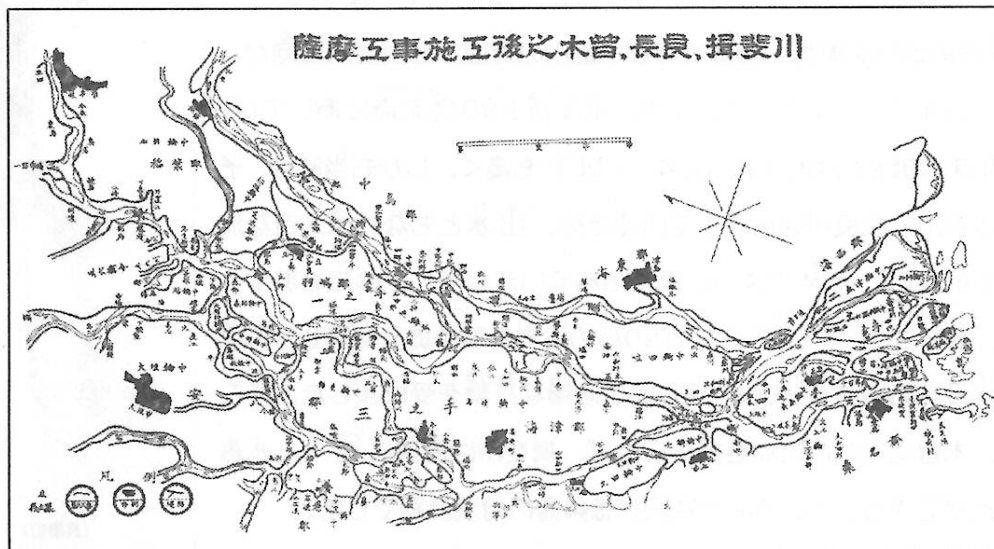
宝曆3年(1753年)の大洪水の後、徳川幕府は水害に苦しむ人々の声を聞き井沢弥惣兵衛為永の三川分流計画を基本にして、薩摩藩(鹿児島県)に木曾三川の治水工事を命じました。この工事は西国大名の筆頭である薩摩藩の勢力を弱めるという目的もありました。

薩摩藩では早速評定の結果、宝曆4年(1754年)2月平田鞞負を総奉行として、この難工事が着手されました。薩摩側から出した人数は家老以下947人、これに土地の人夫等を加えると2,000人にも及び、その費用は約40万両(現在の金額になおして約96億円)の巨費に達する大工事でした。

工事の最大の難関は、油島締め切り工事と大樽川洗い堰工事でした。工事は幕府の方針変更によって計画がたびたび変更されたり、大雨により工事のやり直し等が発生したりで、工事は困難をきわめました。故郷を遠く離れ異郷の地で薩摩藩士は、工事中51人の割腹者と32人の病死者を出しながら、宝曆5年(1755年)3月に完成し、同年5月に幕府の検分を終えました。工事完成後、総奉行平田鞞負は、多くの藩士をなくし、多額の借金を残した責任を一身に負って、同年5月25日早朝、「住みなれし里も今更名残にて立ちぞわすろう 美濃の大牧」の辞世の歌を残し自刃したと伝えられています。



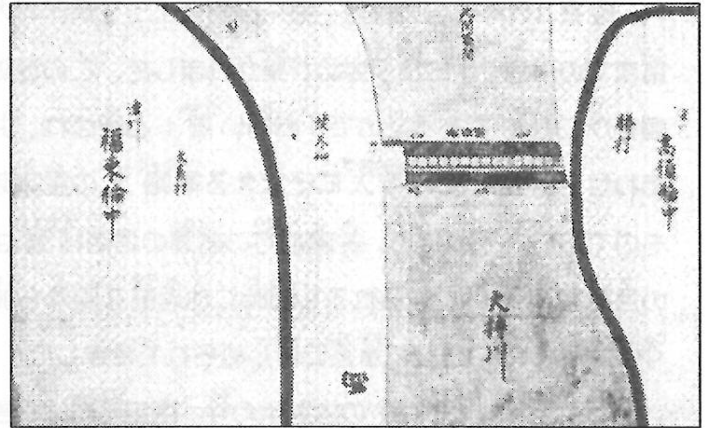
薩摩藩御手伝普請目論見絵図 長谷川千代子氏蔵



また、平田靱負と薩摩藩士 84 人を祭る治水神社（海津市油島）が昭和 13 年に建立されました。治水史上、最大の難工事といわれ、これを「宝暦治水」と呼び、永く、その精神と偉業を尊び称えています。

おおくれがわ あらいぜき 大樽川の洗堰

元和3年（1617年）長良川筋の破堤を防ぐために、長良筋の勝賀附近より揖斐川筋の今尾に通ずる新川を作ることを願い出、元和5年（1619年）12月に完成、これが大樽川です。大樽川の開削によって長良川筋は洪水の被害は減少しましたが、大樽川を通じて長良川の水の一部が流入するようになった揖斐川筋では、洪水の被害が大

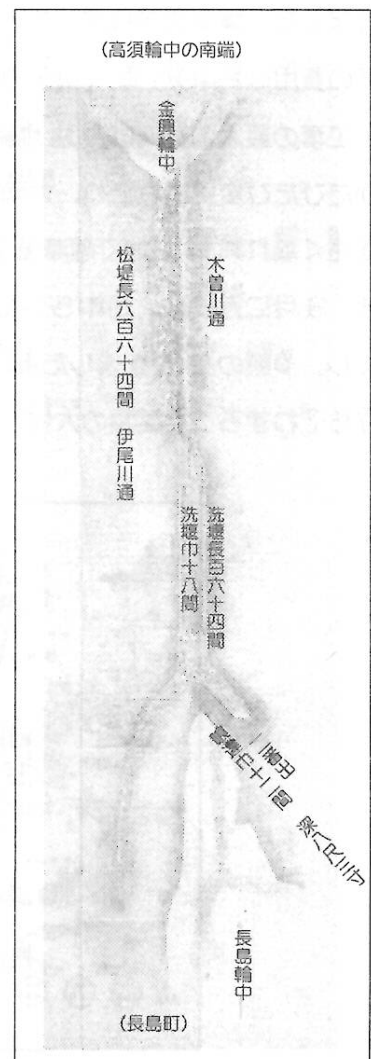


きくなりました。そこで長良川の水量が大樽川に流入するのを制限する食違（常水）堰を寛延4年（1751年）に設けました。しかし、十分でなかったため、宝暦治水のお手伝普請で、下流148間（約270m）の地点に長さ98間（約180m）の洗堰を造りました。この洗堰は高さ4尺（約120cm）、幅33間（約60m）の石堤で長良川の水位が4尺をこえると洪水が洗堰をこえて大樽川へ流れ込むように設けたものです。

油島の締め切り

宝暦治水の時は、油島新田から550間（約1km）、松ノ木村から200間（約362m）の川分堤（高さ2間・約3.6m）、敷10間（約18.1m）馬踏2間が造られました。中央部は340間（約615m）は舟運の便等のため明け置かれました。最大の難工事で、この締切堤は、幕府の笠松役人も「日本の内は申すに及ばず、唐にも是ほどの事は有るまじく…」と賞賛するほど壮大なもので、諸国から見学者が後をたたなかつたと伝えられています。現在の干本松原（海津市油島）は、油島堤ができあがったあとに、その堤の上に多くの「日向松」を植えたものと伝えられています。

濃尾平野の地形は東高、西低であり木曾川の方面から揖斐川に向かって傾斜しています。したがって、木曾、揖斐両川の合流点においては、木曾川の川床は揖斐川より8尺（2.4m）以上も高く、しかも当時は、その上流で木曾川は長良川を合流しているため、出水ともなれば大きな流れとなって揖斐川に奔流のように流れ込んでいました。そのため洪水ともなれば、水位は上昇し激しい水流のため沿岸の輪中堤を破壊し、民家や田畑は水没あるいは流失し、輪中民は悲惨な打撃を受けました。そこで「揖斐、木曾両川の合流点を締め切れれば、揖斐川は自然に流下し水害を防ぐことができる」というのが井沢弥惣兵衛の分流計画でした。



昭和元年の油島金堤堰 絵図